埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Music Education that Fosters Expressiveness and Creativity for Children : Case Study with Eurhythmics and Contemporary Dance

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 七緒子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1253

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

表現力や創造性を育む幼児のための音楽教育
― リトミックとコンテンポラリーダンスによる事例研究を通して ―

Music Education that Fosters Expressiveness and Creativity for Children
Case Study with Eurhythmics and Contemporary Dance

田　中　七緒子
TANAKA, Naoko

Ⅰ　はじめに

近年、子どもたちの習い事の種類は多岐にわたり、幼児、乳児対象のワークショップやイベントが日本各地で行われている。音楽においては、保育所や幼稚園でリトミックがカリキュラムに加えられているところもあり、児童館や子育て支援のためのイベントなどでも取り上げられる機会が増えてきている。

活動の内容は様々であるが、音楽教育において一番重要なことは、子どもに興味を持たせ、内的欲求を引き出すことである。そのためには、子どもが楽しいと感じる経験が大切である。子どもの好奇心や創造性は遊びを通して生まれ、そして笑いやユーモアによって心が緊張から解き放たれる状態で発想力が発揮されると筆者は考える。そのような経験を可能にする機会を作り出すために、本事例研究では、リトミックにコンテンポラリーダンスの要素を取り入れる方法を試みた。

リトミックを創案したダルクローズは、音を単に耳から聴くのではなく、身体で感じ動きを伴った教育方法の重要性を述べている。いかに音に対して興味を持たせるか、それは音楽に合わせて身体を動かし自由に表現し、楽しむことである。リトミックは、身体で表現する楽しさを通して感覚機能に働きかけ、音楽を心と身体で感受する教育法なのである。

もともとリトミックは、音楽教育法の一つとして考案されたのだが、音楽教育のみならず舞踏にも影響を与えている。それは、舞踏の素養のない人であってもリズム体操として取りいれることができる手軽さから、新たなダンスのスタイルを構築する中で使われた[1)]。リトミックがダンスの世界に直接影響したのは20世紀前半からであるが、目的や概念に焦点を当ててみると、1980年代から生まれた新たなジャンルである、コンテンポラリーダンスの理念の一つに共通点があると考えられる。コンテンポラリーダンスは、伝統的な舞踏の既成概念や技法にとらわれず、あらゆるものを融合し、身体を動かすこと自体が楽しくすばらしいという概念で踊られる。音楽を聴いて感じたままに全身で表現することは、五感

キーワード：リトミック、音楽教育、幼児教育、即興演奏、コンテンポラリーダンス
Key words ：eurhythmics, music education, childhood education, improvisation, contemporary dance

に働きかけ、何より表現する楽しさを感じることにつながる。このように、自由な発想で身体を動かすコンテンポラリーダンスの理念と、心と体で音楽を感受するリトミック教育法が相互に関わることで相乗効果が生まれ、子どもの創造性を引き出すことができるのではないかという考えに至った。

本稿では、ダルクローズの考えやコンテンポラリーダンスとの共通の概念を対照しながら、筆者がコンテンポラリーダンサーと共に実施した、音楽とダンスのワークショップについて分析し、子ども一人一人の発想力を引き出し、音楽を介した身体の動きによる自己表現方法について考察する。

Ⅱ　エミール・ジャック・ダルクローズのリトミック教育について

この章では、ダルクローズが目指したリトミックの音楽教育理念について整理していく。

リトミックを創案したダルクローズ（1865～1950）は、ウィーンで生まれ、スイスで活躍した作曲家、音楽教育者である。ジュネーブ音楽学校で和声理論を教えた後、音楽と身体の動きを融合した、リトミックを教育の中に導入した。

ダルクローズは､彼自身の論文集「リズム･音楽・教育」の中で、音楽教育について次のように述べている。

「美的感情は、感覚の繊細さ、神経系の感受性、精神のしなやかさの産物である。子どもの生来の芸術的才能がどんなものであれ、自身の、そして自然の動きであるものすべての意識的な学習が、芸術のもっとも生きいきとした理解へ子どもを導くことは疑いようがない。」[2)]。彼は、自然の動きであるものすべての学習が、子どもに芸術への理解を深めると捉えているが、実際に音楽においてはどのような学習によって導かれるのだろうか。

「子どもに音楽を感じさせ、好きにさせるには、聴取能力を発達させるだけでは充分ではない。というのは、音楽の中でもっとも強力な感覚的要素で、生に最も密接に関連した要素はリズムであり、動きだからである。」[3)]。

「何が音楽を表現豊かなものにし、何が音楽的な音の連続に息吹をあたえるのか。それは動きであり、リズムである。リズムのニュアンスは同時に聴覚と筋肉によって知覚される。」[4)]。

「音楽的に感受性が鋭いというのは、音の高さだけではなく、音のダイナミックなエネルギーや、多少素早い動きのニュアンスを聞き分けられるということである。これらのニュアンスは耳だけではなく、筋肉感覚によっても知覚される。」[5)]。

このように、ダルクローズは音楽を単に耳で聴取するのではなく、動きを伴った学習方法について繰り返し述べている。そして､「人間の肉体ほど表現豊かな楽器で多様な可能性をもっているものはほかにない。」[6)]。と捉え、身体で音楽を表現する音楽教育の有効性を説いている。

ダルクローズは、子ども達に音に興味を持たせる方法の一つとして、即時反応の指導法を導入した。それは、例えば強い大きな音が聴こえたら、象など大きい動物をイメージして動き、弱い音の時はネズミのような小さな動きをするといった、音の強弱を体で表現しイメージを育む教育法である。それは強弱だけではなく、速度や、音の高さ、リズムでも変化を付けることで応用できる。

さらに、音の変化を不規則に提示することで、子ども達は次にどんな音が聴こえるのか

期待するようになり、それによって予知能力が高められる。遊び心を刺激され、音に対する興味が引き付けられれば、そこから集中力、観察力、予知力、即時反応する力を養うことができ、より子どもたちの創造性を引き出すことができるのである。

Ⅲ　コンテンポラリーダンス

この章では、コンテンポラリーダンスの成り立ちや概念について簡単に紹介する。

1980年前後に世界各地で誕生した新たなジャンルの舞台芸術を、1990年ごろからコンテンポラリーダンスと呼ぶようになった。舞踏技法には、バレエやモダンダンス、舞踏などが融合され、作家独自の技法が用いられることもあるが、基本的には規範や中心となるものはなく、従来の美学にとらわれない。地域や作家ごとの表現手段、演出、美意識など自由で多種多様なジャンルのダンスなのである。[7]。

舞踏批評家の貫成人は、「従来の美意識や世界観、歴史認識、身体の在り方を上演によって書きかえる、絶えざる試みにほかならない。」[8]。と述べている。多様性を保ったまま変化し続け、社会の変化をいち早く表すダンスなのである[9]。

教育の分野においては、近年、中学校の体育でダンスが必修科目になっているが、舞踏評論家の乗越たかおは、学校でのダンス教育について、ステップの難易度を上げ点数をつけることよりも、コンテンポラリーダンスが示す、純粋に身体を動かすことが楽しいということを教えるべきであると述べている。自由に踊ることに優劣はなく、一人一人のダンスの在り方でいいという懐の深さが教育に生かされるべきとしている[10]。

このように、既成概念にとらわれず、自由な発想で自己表現する楽しさをみつけていくコンテンポラリーダンスと、リトミック教育法の共通理念が相まって、子ども達の創造性や表現力が引き出されるのではないかと筆者は考える。

Ⅳ　研究実践の分析

ここまで、リトミックの目的やコンテンポラリーダンスの概念について述べてきたが、この章では、上述の教育方法を応用した、ワークショップの事例の分析をする。以下、ワークショップを行う際に気を付けたことをいくつか述べる。

ワークショップを開催するにあたり、動きを伴った音楽の表現活動において、参加者の創造性を引き出すためには、参考になる動きを何も示さずに、音楽に合わせて自由に踊ることが理想である。しかしながら、ダンス経験者でない参加者に自由に動いてもらうことは、実際は大変難しい。特に大人の参加者（保護者）は、自分の動きを周りの人に見られることに抵抗がある人もいるだろう。動きのパターンを知らないまま、恥ずかしさから身体が固くなり、自由に踊るどころではなくなってしまうのである。

そこで、今回のワークショップでは、各課題に入る前にダンスの参考例を提示し、全員で練習することにした。いくつかのパターンを練習し習得することで、動きのイメージを膨らましやすくなる。そこからは、自由な発想で動きの幅を広げることがねらいである。

さらに、これから取り組む課題を印象付け、より興味を促すために、課題の抽象的なイメージ図を簡単な絵で示し、直前に見せることにした。視覚的な刺激からも、創造性をは

ぐくむことができると考えたからである。絵が何を表しているか発言を促し、その意見を肯定的に受け止め、自由に発言しやすい雰囲気を作れるように心がけた。主催者側が考える答えに、ヒントを与え誘導する場合もあるが、あえてはっきり答えは提示せずに、個々の視覚的なイメージを大切にしながら課題に入るように心がけた。

今回のワークショップでは、ダンサーが考案した動きや抽象画に対して、筆者が音楽を付け加えていったのであるが、分析についてはあくまで筆者個人の見解とする。

1．ワークショップ概要

・実施対象：３歳から６歳の幼児と保護者
・参加者　：27名（３歳から６歳園児10名、未就園児７名、保護者10名）
・ワークショップ主催者:ピアニスト１名(司会、進行)
　コンテンポラリーダンサー２名
・使用楽器：ピアノ
・実施日時：2018年12月21日　１時間
・事例の実践方法：

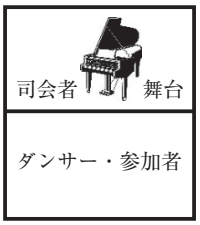
（１）これから行う課題のイメージを膨らませるために、抽象的な絵を見せる。絵が何を現しているか子どもたちに自由に発言させる。司会者は「そうだね、○○にも見えるね～これはなんだろう？」と子どもの意見を否定することなく同調しながら、発言しやすい雰囲気を作るよう心がける。

（２）課題によってダンサー二人が音楽に合わせて見本を見せる。

（３）課題が難しい場合は、全員で踊りの部分練習をする。

（４）音楽に合わせて全員で動く。

【図１】会場図



課題１＜身体を使ったあいさつ＞

①内容：ピアノの音に合わせて親子関係なく自由に歩きまわり、音が止まった時に近くの人と①手と手をくっつける。②足③おしり④肩でも同様に行う。

②目的：ピアノの音に合わせて歩行し、合図で止まる、静と動を感じる（即時反応）。テンポの緩急、音程の高低の認識をする。初対面の人と触れ合い緊張をほぐし、お互いの距離感を縮める。

③配慮：ダンサーが見本となり、集団に混じって色々な人と関われるようサポートする。司会者は、ピアノの音を止めた時に、大多数の参加者がポーズを取れるまで待つ。同じ人ばかりと組まないように声をかける。

④音楽：歩きやすいテンポでリピートしても飽きないように、循環コード（※１）で即興伴奏し、途中で音が止まることを予知する合図の音を入れる。

循環コードを和音記号で表すと、下記のようになる。

（Ⅰ→　Ⅵ7→　Ⅱm7→　Ⅴ7）×　○回
繰り返す　→　合図の音

音域は、①手、②足の時は中音域、③おしりの時は低音、④肩の時は中高音で弾き、体の位置と音の高低をできるだけ合わせるようにする。

合図は、慣れてきたら予測できないように不規則に入れる。Ⅴのドミナントの後にい

つも合図がくると予想できてしまうので、あえて別のコードの間に入れる。テンポにも緩急の変化を持たせる。

（※１）循環コードとは、Ⅰの和音が続く場合やⅠからV7へ動く場合に代理として使われ、下記のように４つのコードを延々と続けて使えるコード進行であることから、循環コードと呼ばれる。Ⅵ7は、Ⅱm7のセカンダリードミナントである。（※２）

［例１］Ⅰ→Ⅵ7→IIm7→V7　→
Ⅰ→Ⅵ7→IIm7→V7　→Ⅰ→Ⅵ7→IIm7→V7

（※２）セカンダリードミナントとは、それぞれの調に一つずつしかないドミナント7thは、調を印象付ける大切なコードである。ダイアトニック・コードそれぞれの前に５度上（４度下）のドミナント7thを置くことをセカンダリードミナントという。例えば、ハ長調のC（Ⅰ）のドミナント7thはG7（V7）であり、Dm7（Ⅱm7）のドミナントはA7（Ⅵ7）である。

（１）結果

見本を見せたのでわかりやすかったのか、自然に親子であっても別々に自分の行きたい場所に移動し、近くの人とポーズを取っていた。人とくっつく場面では、保護者同士顔を見合わせて笑ったり、人のポーズを見て真似したり、笑い声が絶えず聞こえた。課題に慣れてくると動きが徐々に大胆になり、足の場面では、片足でバランスを取ってくっつけるのを楽しむ人、寝転んで足を上げる人など、色々なポーズにチャレンジする姿が見られた。「次はおしりをくっつけてみよう」と言うと、子ども達のおしりに対する反応は予想通りで盛り上がった。肩のポーズの時には、場所と動きに慣れたようで、合図の音が聴こえると時間をかけずに相手を見つけてポーズを決められるようになっていた。

音楽に関しては、説明がなくても、速度変化に合わせて歩く速さを変えて、音をよく聴き反応している様子が見られた。

（２）考察

手と手をくっつける簡単な動作から始め、徐々に難易度を上げたので、戸惑う人もいなくスムーズに進めることができた。

そして課題に慣れてきた頃に、規則的に出していた合図の音を不規則にすると、音がいつ鳴るのか予測できないため、音に集中する様子が見られた。今か今かと待った合図の音が聴こえて、慌てて相手を探す様子が、椅子取りゲームに似ている雰囲気を感じた。合図が予測できないところに、椅子取りゲームと今回の課題の共通点がある。集団での音に対する集中力を高めるのに有効な課題であることがわかった。椅子取りゲームの場合は、常に鬼になる緊張感があるが、この課題の場合は鬼の存在はなく、何人とくっついてもいいので、その点は気楽に参加できると感じた。

課題２＜模倣＞

①内容：場所を自由に移動しながら、ダンサーを常に視界に入れ、ダンサーの動きを再現する。始めに床をたたく、ゆっくり寝る、腕をまわすなどあまり移動せずにできることを練習する。模倣することに慣れてきたら、会場を自由に駆け回りながら行う。

②目的：注意深くダンサーの動きを見て、動きを再現する視覚的模倣により、集中力を

養う。歩いたり走ったり会場全体を大きく使い（空間把握）、身体のコントロール、機敏性を育む。参加者全員が同じ動きをする一体感を味わう。

③配慮：ダイナミックに走り回れるように動きに緩急をつける。お互いがぶつからないよう注意する。

④音楽：この課題は、聴覚ではなく視覚による集中力を養うため、あえて無機質な一定のテンポで同じリズムを繰り返す、ミニマル・ミュージックを参考にした。ピアノをパーカッションのような雰囲気として使うために、和音は印象に残らない半音を組み合わせた不協和音を、その場の雰囲気で変化させていった。一定のリズムパターンを繰り返すのだが、高低、大小、半音の不協和音の組み合わせに変化を付けた。
リズムパターンは、アメリカの作曲家、スティーブ・ライヒが作曲した「Clapping Music」を参考に４分音符＝170のテンポで演奏した。

＜スティーブ・ライヒについて＞

1936年アメリカのニューヨークで生まれ、ミニマル・ミュージックと呼ばれる反復を中心に作られたジャンルの先駆者である[11]。西洋クラシック音楽の他、ジャズなどアメリカ固有の音楽の構造、リズムや和音を取り入れた。また、アフリカやインドネシア、バリ島のガムランやヘブライ語聖書の詠唱法、ドラミングにも影響を受ける。スティーブ・ライヒの作品は、繰り返す音型、ゆっくりした和声的リズムやカノンが特徴的である[12]。

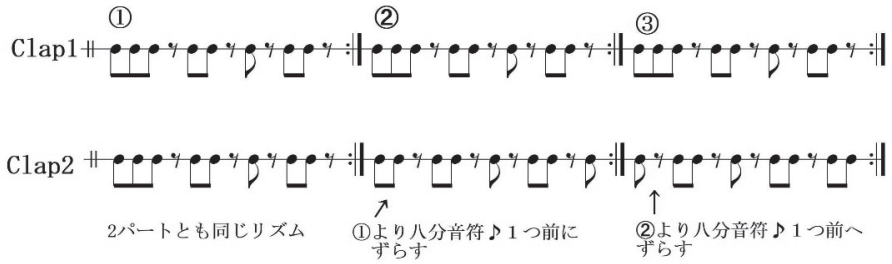
「Clapping Music」**【譜例１】**参照

今回のワークショップで使用したリズムのアイデアは、1972年に作曲され「Clapping music」と呼ばれる、拍手によって演奏される曲を参考にした。この曲は、楽器を必要としない手拍子による演奏のため、ライヒ本人はアンコールで演奏したこともあった。本来は、二名で演奏される。一人がある一定のリズムパターンを繰り返し、もう一人は、同じリズムパターンを繰り返すたびに８分音符１つずつ前へずらして演奏する[13]。**【譜例１】**では、始めの３パターンまでを参考までに掲載する。

（１）結果

この前の課題で緊張がほぐれ、盛り上がってはしゃいでいる幼児もいたので、クールダウンさせ静かにさせるために口を押さえ、「シー」という動作から始めた。模倣してい

【譜例１】「Clapping Music」スティーブ・ライヒ作曲



る間に、はしゃいでいた幼児が徐々に静かになり、ダンサーの動きに集中することができた。始めは、会場を歩いたり走ったりすることが楽しくて、ダンサーを見ていない子どもがいたので、何度か動きを止めて、誰の動きを真似すべきなのか問いかけ確認した。繰り返している間に、何に注意しなくてはいけないのか理解してきたようで、最後はほぼ全員が集中してダンサーの動きを観察するようになった。

（2）考察

前の課題のように、音に反応して体を動かすのではなく、視覚的に動きを捉え集中力を養うことが目的なので、動きが止まっても一定のテンポの音をあえて慣らし続けた。あまりダンサーを観察せずになんとなく動いていた子どもにとっては、音に頼れないため始めは難しいように感じた。リトミックの音楽によって動きをサポートする場合（ダンサーの動きを注意深く観察しなくても、音が止まれば動作も止まると気付きやすい）と比べて、見ていないと次にやることがわからないので難しいのだが、そのことを理解してからは、参加者の視覚的な集中力は高まっていった。最後に、大きな和音の音をアクセントで弾くと、最後だと気が付いたのか、今まで声を出さなかった数名の子どもが「わー！」と叫んだ。この様子からも、音を聴いていないわけではなく、聴覚と視覚の働かせる場面が違うことを理解していることがわかった。

課題３＜白い紙を使ったダンス＞

①内容：白いA4の紙を一人一枚使い、つかまないで手から紙が離れないように自由に動く。
これまでヒントとして見せてきた抽象的な絵は白黒だったが、初めて色を使った絵（四角く切った水色の紙が沢山貼ってある白い紙）を見せる。何を表現しているか問いかけ考えさせ、自由に発言させる。
ダンサーがひらひらと白い紙を踊りながら１枚ずつ配る。全員で、手から紙が離れないように踊る動きのパターンをいくつか練習してから、曲に合わせて踊る。

②目的：これまでの課題で取り組んだ、自分の体で表現することを発展させ、道具（A4サイズの紙）を使った動きによる創造性を養う。レガートでゆったりした音楽のイメージに合わせて体を動かす心地良さを味わう。絵と音楽により、白い紙が何を表しているかイメージを膨らませ想像力を高める。

③配慮：ダンサーが踊りながら紙を配る間、その動きを落ち着いて観てもらうために、始めに参加者を座らせる。自発的に動けるようにするために、紙が手から離れないいくつかの動きのパターン例を練習する。もし難しそうだったら、長めに練習時間を設ける。

④音楽：サン＝サーンス作曲　動物の謝肉祭より「白鳥」を中心に演奏した。紙を配布する時は、前奏以外の白鳥のメロディーは弾かず、コードだけの演奏により、参加者は曲の雰囲気をつかむ。「白鳥」は前奏が特徴的なので、メロディーを弾かなくても何の曲かわかる参加者もいると思い、前奏はヒントとして弾くことにした。コード伴奏で何の曲か予測をし、２回目でメロディーを聴くことで、知っている曲であることに気付いて、より親しみを持てるようにするのがねらいである。

（1）結果

白と水色の絵を見せると、幼児たちからは、「氷」「雪」など水に関する発言が聞かれた。白い紙を配るときは、ダンサーの踊りとひらひら動く紙に集中し、静かに座って観ていた。紙を体から離さないように、左手から右手にそしてまた左手に腕を左右にふって動かす動作に慣れたら、片手から離れないよう遠心力を使って自分の周りを回る練習をした。始め難しそうに扱っていた子どももいたが、慣れてくると自分の持っている紙に集中して取り組む様子が見られた。

（2）考察

ピアノの音からゆったりした曲のイメージを掴めるようで、三拍子に合わせて身体を揺らす様子が観察できた。前奏とコード伴奏だけで「聴いたことがあるけど、何だったかな？」と曲を予測し、そのコード進行に慣れてからメロディーが始まることで白い紙で表現する物が白鳥であるということに気が付く参加者もいたようだった。音の響きを聴いてイメージを膨らませ、各自が感じたように表現することを目指していたので、白い紙が何を表しているか、曲についてあえて解説はしなかった。曲を知らない幼児もいたとは思うが、純粋に曲の雰囲気で想像を膨らませる上では､「白鳥」というはっきり具象を伝える必要はないのかもしれないと感じた。

課題４＜参加者全員で一つのクリスマスツリーになろう＞

①内容：参加者各自が丸いボールのようなオーナメントを手に持ち、リースで囲った舞台上と舞台下の２段の場所（**【図２】**では円のように書かれているが､その円の中）に全員入り並ぶ。近くの人のオーナメントと自分のオーナメントをくっつけて音楽の合図でポーズを決めたところで、ダンサーが遠くにセットしたカメラまで走り、写真を撮る。クリスマスツリーの全体像は、離れた場所からでないとわからないので、写真を撮り、後で参加者に送ることにした。

【図２】課題４の会場図

②目的：曲想を感受し、３拍子のリズムの拍を感じる。他者と共にポーズを取ることで、空間、時間を共有し、一つの物になる一体感を感じる。

③配慮：リースの中にいる子ども達を飽きさせず、写真を撮る間も楽しんでもらおうと、全員がポーズを決めている間に輪の中にいる２名のダンサーが交互に走ってシャッターのタイマースイッチを押しに行くことにした。

④音楽:チャイコフスキー作曲「花のワルツ」の中間部分のフレーズを３回繰り返し（原曲では１回のフレーズ）合図として使用した。**【譜例２】**参照。合計６回ポーズを決めて写真を撮影した。

バックミュージックとして、オーナメントを配布する間は､（課題３）のように花のワルツのコードだけの伴奏を、そして写真を撮り終わり、次の課題へ移動する間のつなぎの間はメロディー付きで演奏した。

（1）結果

ダンサーに先導されて、合図の音が聞こえるまで３拍子のリズムに乗ってゆらゆら身体を揺らす様子が観察できた。未就園児も飽きずにリースの中でポーズを取っていた。曲の合間にダンサーが走ってタイマーを押しに行くと、毎回笑いが起こった。３名の子どもは、輪の中に入らずカメラの後ろでみんなの様子を観察していた。

（2）考察

ダンサーが毎回シャッターを押しに行くという行為は、何のためにカメラの方に走っていっているのか、カメラで何をしているのか、理解していない子どももいるようだったが、保護者から笑いが起こると、回数を重ねるうちに子ども達も徐々に反応していった。子ども達は視覚的に動いているものに集中するので、ダンサーが往復するこれらの動作がなければ、子ども達を枠から出ずに飽きさせないのはなかなか難しかったように感じる。

移動の際に未就園児を抱きながら体を揺らす保護者の姿や、３拍子に合わせてステップを踏む姿が見られた。楽譜やピアノをのぞき込む保護者もいたが、やはり馴染みのある曲を使うと音楽に対してより耳を傾けやすいようである。

課題５＜鑑賞＞

①内容：ピアノの演奏に合わせて踊るダンサー二人によるパフォーマンスを鑑賞する。

②目的：アコースティックピアノの音色と、ダンサーのダンスを鑑賞することで、聴覚、視覚の両方からの刺激で表現力、創造性を育む。

③配慮：参加者全員が鑑賞しやすいように、また参加者に近い場所で臨場感を感じられるように、円になって座らせ、その中で踊ることにした。

④音楽：バッハ作曲「平均律第一番プレリュード」

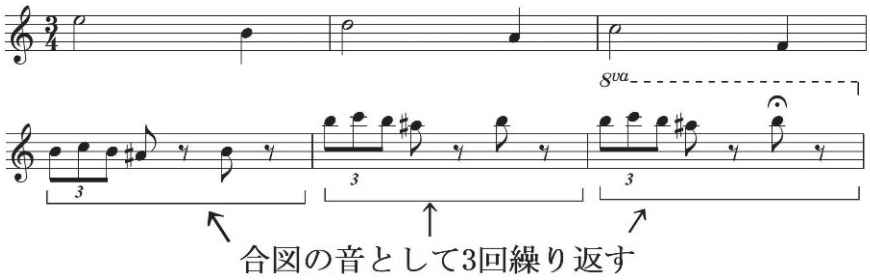
（1）結果

円の中で２名のダンサーが踊り出すと、参加者は二人の動きを目で追い、座って集中して鑑賞していた。ダンサー一人が、子どもの一人に近づいて目の前で踊ると、その後を追いかけるように子どもが立ち上がってついていった。一人が真似するとまた一人立ち上がり、合計12名の子どもがダンサーの動きに影響を受けて動き出した。

（2）考察

子どもたちが静かに座ったまま鑑賞できるか気になっていたが、ダンサーの後ろをつい

【譜例２】合図として使用するためにアレンジした「花のワルツ」の一例



ていくことは予想していなかったので、演奏しながら子どもの様子を観察していた。何名かの子ども達は、始め立ち上がることを保護者に止められていたが、一人がダンサーの後ろをついていくと、同じように動きだす子どもの数が徐々に増えていった。その様子は、まるでハーメルンの笛吹きについていく子どもたちのような光景で、ダンサーの踊りにつられて動き出してしまう、音楽とダンスの効果を感じた。

課題６＜ラテンのリズムでダンス＞

①内容：今までの課題を組み合わせた総合ダンス。

（ｉ）円になり全員で手をつないだまま、ダンサーの動きを模倣する。身体だけではなく足で床を踏み鳴らしたり、体をたたいたり、ジャンプ、片足けんけんなどの動きに加えて、声も同時に発する。

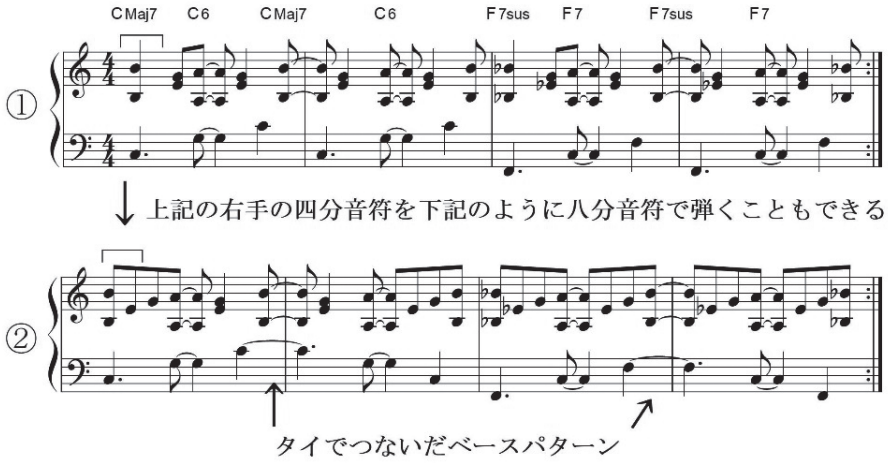
（ii）２組に分かれて、「はないちもんめ」のように１組目が８歩進む時に二組目は８歩下がる動きを基本に、足を前に蹴り上げ、腕を回すような動きを足していく。前に進む時は、1、2、3、4で前進、5、6、7、８で動きを入れる。一組目が行った８拍の動きをその後の８拍で、２組目が再現する。

（iii）手拍子によるリズム模倣や輪になり隣の人と手と手を叩くリズム遊びなど、スキップしながら自由にダンス

②目的：動きに合わせて言葉を発したり、手拍子や床を踏み鳴らしたり、動きと共に身体を使って音を作り出すことで、より五感を刺激し、リズム感、反応力、表現力を養う。ラテンのリズム感やスキップでの躍動感を、身体で表現する。模倣から発展させ、音楽に合わせてダイナミックに踊る楽しさを感じる。

③音楽：自然に身体を動かしたくなるようなラテンのリズムで、「ジングルベル」を演奏することにした。使用楽器がピアノだけだったので、左手でベースのアーフタクトのリズムを、右手でモントゥーノ（ラテン音楽において、シンコペーションを伴うリズムパターンを打楽器のように繰り返し弾くピアノ奏法）を演奏した。**【譜例３】**は、

【譜例３】ワークショップで弾いた、モントゥーノの即興伴奏の一例



前奏で使用した一部分を載せている。

ラテン音楽のベースは、**【譜例３】**②の１小節目の４拍目と２小節目の１拍目をタイで結ぶのが基本のパターンであるのだが、今回のワークショップではベースやパーカッションはなく、ピアノだけの伴奏だったので、小節の１拍目をわかりやすくするために、タイでつながず、①のように、小節ごとに、１拍目を弾くパターンにした。①の右手のパターンの四分音符は、②のように八分音符でコードの音を足すこともできるので、自由に組み合わせると変化に富んだ伴奏になる。

（参加者からの感想）

参加者にアンケートを実施し得られた回答のうち、一部を紹介する。

・ピアノもダンスも間近で鑑賞でき、貴重な時間だった。
・踊りに対して恥ずかしさがあったが、普段から気持ちや言葉と一緒に身体を使って表現するのも自分自身にとって気分転換になるのだと改めて感じた。
・ぜひ、また五感を使った遊びを企画してほしい。踊っている姿を見ていることが一番楽しかった。
・寝る前に子どもが、今日は楽しかったと言いながら眠ったので、相当楽しかったのだと思う。
・次はいつ参加できるのか、子どもが楽しみにしているので、また開催してほしい。

２．分析結果

今回のワークショップでは、こちらが参加者に対して、指導的な関わりをするのではなく、できるだけ遊びのセンスを入れながら誘導し、子どもたちの創造性を引き出したいと考えた。

集団の中には、なかなか輪に入らない子どもや、見本通りに動かない子どももいる。その場合、保護者は自分の子どもを見本通りやらせなくてはと子どもに働きかけることに気を取られ、なかなか保護者自身が楽しめなくなってしまう。今回のワークショップでは、「こうしなくてはいけない、というような規制がなく、ある程度の枠組の中であれば自由に動いていいという雰囲気だったので、子どもがとても楽しんでいた」との意見があった。そして、保護者からは、「ダンスを一緒に踊ることに始めは抵抗があったが、周りの目を気にしなくても動けて、気分転換になった」との感想が寄せられた。子どもは、時には大人が考えている以上の創造性を発揮することがある。それは、楽しいと思える環境と、ある程度の自由の中でこそ生まれる。子ども達の動きを規制して注意しなくても良いとする雰囲気だったことで、かえって保護者は子どもを注意することに気を取られずに、楽しむことができたのかもしれない。その結果、子ども達はのびのびと全身で駆け回り、保護者もダイナミックに動き回ることができたのだと感じる。

自由に音を感じたまま動くことは、簡単なようで、緊張している場面ではなかなかできることではない。エリザベス・バンドゥレスパーは、リトミックを教えるためには、笑いや楽しさが必要で、遊びへのセンスを持って臨むべきとしている[14]。今回のワークショップでは、楽しい雰囲気を作るために、（課題１）では、おしりをくっつけることを取り入れた。そして（課題４）では、カメラのシャッターをわざと慌てて押しに行く動作、また（課題

６）ではおもしろいポーズを取ってみるなど、笑うことで緊張をほぐし全身で表現できるように心がけた。これにより、参加者の表情はやわらぎ、その後の課題がよりダイナミックに動けるようになったと感じた。

Ⅴ　結論と考察

本稿では、音楽に合わせて身体を動かす音楽教育法の効用について取り上げ、リトミック教育とコンテンポラリーダンスの要素を取り入れたワークショップの実践事例の分析をした。

ダルクローズは、「リズミカルに動き回り、私たちを導き、インスピレーションをあたえてくれる音楽に心身のすべてをゆだねるよろこびは、存在し得るもっとも偉大なよろこびの一つである。」[15]。と述べている。今回のワークショップでの、子どもたちが自発的に動きまわる姿は、正にダルクローズの言う、よろこびを全身で表現しているように感じた。

特に、鑑賞用として計画していたダンサーのパフォーマンスに、ダンサーの動きにつられて動き出す子どもたちの姿は、子どもの素直な自己表現の現れである。柔軟な子どもの時期にこのような五感に働きかける活動は、創造性や発想力が養われる大切な経験になると感じた。

子どもは、日々の遊びの中で楽しさを発見し、それが感性を養うことにつながる。楽しさが子どもに色々な興味を持たせる原動力になるのである。そうした遊びや笑いの楽しさによって、子どもたちの好奇心が引き出され、自由な発想や、創造性は生まれる。

リトミックにおいてもダンスにおいても原点は同じである。音色の美しさやリズムに合わせて動く自己表現の楽しさを見つけることで、音楽とダンスの相乗効果が生まれ、表現力、創造性が養われるのである。今回は、３才～６才の幼児と保護者を対象としたワークショップであったが、今後は異なる年齢層でも事例研究を積み重ねていきたい。

最後に, 今回ご協力いただいた、ワークショップの主催者であるコンテンポラリーダンサー前澤香苗氏、工藤洋子氏に深く感謝の意を表する。

注

1）乗越たかお（2010）『ダンス・バイブル』河出書房新社、pp. 84－86
2）エミール・ジャック＝ダルクローズ著、河口道朗編　河口眞朱美訳（2009）『定本オリジナル版リズム・音楽・教育』開成出版、pp. 168－169
3）同上書、p. 93
4）同上書、p. 79
5）同上書、p. 79
6）同上書、p. 244
7）貫成人（2012）「コンテンポラリーダンス」『バレエとダンスの歴史』平凡社、pp. 229－pp. 230
8）同上書、p. 253
9）乗越たかお（2010）『ダンス・バイブル』河出書房新社、pp. 129
10）同上書、p. 273
11）小沼純一（2008）『ミニマル・ミュージックその展開と思考』青土社、p. 80
12）ハンス・ウルリッヒ・オブリヒト著／篠儀直子・内山史子・西原尚訳（2015）『ミュージック「現代音楽」をつくった作曲家たち』フィルムアート社、p. 276
13）小沼純一（2008）『ミニマル・ミュージックその展開と思考』青土社、p. 100
14）エリザベス・パンドゥレスパー著／石丸由理訳（1996）『ダルクローズのリトミック』ドレミ楽譜、p. 15
15）小沼純一（2008）『ミニマル・ミュージック

その展開と思考』青土社、p. 261

参考文献

田中七緒子（2017）「保育者養成課程における学生の意欲を育てるための、教師によるコード伴奏の手法－代理コードを中心に－」埼玉学園大学紀要、人間学部編、第17号

板野平　監修／上原雅之・野上俊之編著（1987）『ダルクローズ教育法によるリトミック　コーナー』チャイルド本社、pp. 11－14

中川華那、片山美香（2015）「音楽による幼児の表現活動の意義と保育者の援助に関する研究―人とかかわる力をはぐくむためにー」岡山大学教師教育開発センター紀要、 第５号、pp. 73－82

安藤昌子（2007）「音楽活動―子どもの「楽しかった」を引き出す工夫」名古屋柳城短期大学研究紀要、第29号、pp. 203－219

持田京子、金子智栄子「子どもの創造的音楽表現に及ぼす保育者の影響」文教学院大学人間が苦部研究紀要、Vol.10, pp. 37－47

伊藤仁美（2010）「保育者に求められる音楽表現力の育成に関する一考察」こども教育宝仙大学紀要、Vol1, pp. 9－15

佐藤久美子（2017）「幼児教育において音楽教育の必要性～リトミックに着目して～」四条畷学園短期大学紀要、第50号、 pp. 172－175

藤井菜摘（2019）「コンテンポラリーダンサーのウォーミングアップ時の選曲に関する研究―音楽がコンテンポラリーダンサーの動きに与えるえいきょうについての一考察」東京文化教育学研究紀要、No.31

藤井菜摘（2018）「コンテンポラリーダンサーは音楽からどのような発想を得て舞踏動作に至っているのか」東京文化教育学研究紀要

中野優子、岡田猛（2011）「コンテンポラリーダンスにおける即興プロセスの解明」日本認知科学会、第28回